

2018 年 3 月 25 日（日）「弟子に与えられる悟り」

マタイ 16:1-12（その 2）

1 パリサイ人やサドカイ人たちがみそばに寄って来て、イエスをためそうとして、天からのしるしを見せてくださいと頼んだ。2 しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、夕方には、『夕焼けだから晴れる』と言うし、3 朝には、『朝焼けでどんよりしているから、きょうは荒れ模様だ』と言う。そんなによく、空模様の見分け方を知っていながら、なぜ時のしるしを見分けることができないのですか。4 悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」そう言って、イエスは彼らを残して去って行かれた。

5 弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れた。6 イエスは彼らに言われた。「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」7 すると、彼らは、「これは私たちがパンを持って来なかったからだ」と言って、議論を始めた。8 イエスはそれに気づいて言われた。「あなたがた、信仰の薄い人たち。パンがないからだなどと、なぜ論じ合っているのですか。9 まだわからないのですか、覚えていないのですか。五つのパンを五千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。10 また、七つのパンを四千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。11 わたしの言ったのは、パンのことなどではないことが、どうしてあなたがたには、わからないのですか。ただ、パリサイ人やサドカイ人たちのパン種に気をつけることです。」12 彼らはようやく、イエスが気をつけよと言われたのは、パン種のことではなくて、パリサイ人やサドカイ人たちの教えのことであることを悟った。

【序論】

先ほど一緒に「主の祈り」を唱えました。「主の祈り」は「天にまします我らの父よ」と父なる神様に呼びかけた後、三つの「神と人との関係」に関わる祈りがささげられます。続いて、「人の生活」に関する三つの祈りがささげられる。その「人の生活」に関する祈りのトップに「我らの日用の糧を今日も与え給え」が置かれているのですが、このことは「食べること」が私たちの宗教生活の重要な位置を占めていることを証ししているように思えます。私たちは「食べること」を信仰生活と切り離して考えやすいかも知れませんが、しかし、実はこれは私たちの信仰と密接に関わる問題なのです。「食」というのは一つの象徴でありまして、私たちの生活に必要な一切のものを総括しています。ただ、「食」は確かに何を置いても生きていくために不可欠なものであり、人は食っていくためには他のあらゆる物を売り払うでしょう。それゆえ、「食」は私たちの命

に関わるものです。信仰をもって「食」に関することを祈るということは、私たちの命を神に預けるということ。この命に必要なものは神から与えられると告白することなのです。それほど重みを感じながら、私たちは「我らの日用の糧を今日も与え給え」と祈っているでしょうか。

【本論】

さて、先週は講壇交換でしたが、再びマタイ福音書の講解に戻ります。前回も同じ箇所を扱ったのですが、1～4節と5～12節に分け、今日は後半部分を学ぶことに致します。ただ、この二つの箇所は本来分けることのできない一つのテーマで貫かれていますので、全体として捉えながら読む必要があるでしょう。

本論1. パリサイ人・サドカイ人のパン種

弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れた。イエスは彼らに言われた。

「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」(16:5-6)

パリサイ人とサドカイ人による反対に遭い、主イエス一行はまた「向こう岸」の異邦人の地（デカポリス）へと渡らざるを得なくなりました。その航海の途中で、食糧がほとんど底をついていることに気づきました。通常、旅に出るに当たっては、お弁当を用意したのでしょうか。マルコ 8:14 によると、パンは一つだけあったようです。

このような状況に引っ掛けて、主イエスは含みのあることを語り始める。ここで言われている「パリサイ人とサドカイ人のパン種」とは、12 節によると「彼らの教え」のことを言っているようであります。パン種とは酵母のことで、少量であっても粉に入れると粉全体をプクッと膨らませてしまう。このような性質から、パン種は罪や悪を象徴するものとして捉えられていました。悪い噂、悪い教えというものはあっという間に広まる傾向があります。昨今、インターネットで有名人の悪い情報が流れると、瞬く間に炎上し、実際にそれが起きたかどうか分からない段階で爆発的に噂が広まってしまいうのを私たちは見ているでしょう。物事は真実であるかどうかをまず見極めなくてはなりません。そういうところで、私たちの知性が問われるのです。

主イエスがここで「パリサイ人とサドカイ人のパン種（即ち「教え」）」に警戒するよう訴えておられるのは、その教えが主イエスの共同体にも瞬く間に悪い影響を及ぼす危険性を持っていたからです。弟子たちも、主イエスの弟子になる前は、律法学者の教えを中心とした宗教生活を営んでいたかも知れません。身に染み付いた教えに戻って行っ

てしまう危険性があった。十二弟子は真新しい主イエスの教えによって築き上げられなく
てはなりません。そこに律法主義、世俗主義が入り込むことを主は恐れたのです。も
う少し突っ込んで考えてみましょう。律法主義、世俗主義が人にもたらす影響とはど
ういうものか。それは、主イエスに対する不信、「見ても信じない心」をもたらすとい
うことです。自分の力で律法に従って生きていこうとする時、神の恵みが見えなくな
るのです。「食」に関する問題に照らしてみますと、食っていくことを自分の力でど
うにかやっていることのように思い始める。そうなりますと、そのための労働は重苦
しいものになります。なぜなら、神の恵みによって自分は一切を得ているという視
点を失ってしまうからです。神は私たちが生きていけるように仕事を与え、収入
を得させ、食べさせてくださっている。恵みに立つ時、働くことは喜びになる。そ
して、「食」も神から来るものであることを忘れなくなるでしょう。神にささげるとい
うことも楽しいこととなっていく。この良循環を生み出すのが恵みに立つ生き方
です。反対に、律法主義、世俗主義とは、物質に執着する生き方であり、恵みと
はかけ離れています。

本論 2. 食に執着している弟子たち

すると、彼らは、「これは私たちがパンを持って来なかったからだ」と言って、議論を
始めた。(16:7)

主イエスが始めた「パン種」の話は、確かに聞く方にとっては少々意味が掴みにく
い。なぜなら、「パンがなくてどうしよう」と言い始めたところで、主が「パン種」
の話を持ち出したからです。弟子たちと主イエスとの間には次元の異なる問題が
ある。弟子たちが心配しているのはひたすら「食」のこと。主イエスは「教え」の
こと。

皆さん、弟子たちの言っていることでおかしいことがあるのに気づかれな
いでしょうか。パンが一個でもあれば、共におられる主イエスには何がお
できになるか。そうです、パンを増やし、十二分に食べさせる力が
おありなのです。それは、5000 人の給食、4000 人の給食で既に見てきた
ことでした。ところが、弟子たちは主の力、主の御業を忘れ、おた
おたしている。

イエスはそれに気づいて言われた。「あなたがた、信仰の薄い人たち。パンがないから
だなどと、なぜ論じ合っているのですか。まだわからないのですか、覚えていない
のですか。五つのパンを五千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。また、
七つのパンを四千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。わたしの言
ったのは、パンのことなどではないことが、どうしてあなたがたには、わ
からないのですか。ただ、パリサイ人やサドカイ人たちのパン種に気をつ
けることです。」(16:8-11)

弟子たちの不信仰に愕然とされた主イエスですが、ここでの論理は少々難しい。5000人、4000人の養いが引き合いに出され、その上で教えに気をつけよと言われるのです。

私なりに考え抜いた末、次のような答えが出てきました。主イエスは、ご自分がまことの養い主であり、その方が共にいることを忘れた弟子たちの内に、しるしを見ても信じない不信仰を見て取られたのです。「しるしを見ても信じない」のは誰であったか。そう、パリサイ人、サドカイ人の姿勢とそっくりなのです。彼らは16章の冒頭で「しるしを見せてくれ」と要求してきました。しかし、それは信じるためではありません。仮に主イエスがしるしを与えたとしても、彼らは決して信じないのです。これまでに神の国のしるしは主イエスの御言葉と御業によって十分に示されてきた。それでも彼らは信じなかったのです。そして、ここに来て弟子たちまでもが、主の養いというしるしを忘れ去っている。つまり、敵対者の心と弟子たちの心に、共通した不信仰がある。「しるしを見ても信じない心」であります。

本論3. 敵と弟子に共通する「見ても信じぬ心」

ですが、12節は弟子たちがただ不信仰のままで終わる存在ではないことを教えています。

彼らはようやく、イエスが気をつけよと言われたのは、パン種のことではなくて、パリサイ人やサドカイ人たちの教えのことであることを悟った。(16:12)

彼らはここで「悟った」と言われています。これは重要なことです。弟子であるか、そうでないかを決定的に分けるポイントと言えるでしょう。主イエスは彼らに失望しました。そして、叱責しました。しかし、それで終わりなのではなく、弟子たちは心の目が開かれ、主の言わんとしていることを理解したのです。

実は、これとよく似たことが以前にもありました。主イエスが湖の上を歩いて弟子たちの許へ行かれた時、彼らは主を幽霊と見間違えた。彼らの不信仰はこういうところにも現れていました。しかし、主が舟に乗り込み、風がやむと、彼らは「確かにあなたは神の子です」と言って、礼拝へと導かれたのです(14:22-33)。

このように、主の弟子は一時的に不信に陥ることがあったとしても、必ずそこから開眼されていく。しるしの意味を後から理解することもある。すぐにではないかも知れない。聖霊が働く時に、心は柔らかくされ、主イエスが言っておられることが分かるようになるのです。

一方、主イエスに敵対する者は盲目に盲目が加えられていく。そのことを表す象徴的な出来事がヨハネ福音書9章に描かれています。シロアムの池の、生まれながらの盲人

の目が、主イエスによって開かれ、彼は肉体的な目だけでなく、霊の目も開かれていきました。何者をも恐れぬ信仰告白を、パリサイ人たちに対して大胆に語っていく。一方、その盲人の目が開かれたという紛れもない事実を目の当たりにしながら、パリサイ人たちは主イエスを信じることができない。かえって、不信仰に不信仰が加えられていくのです。

そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」(ヨハネ9:39-41)

【結論】

主の弟子であるかどうかは、主の御業、しるし、御言葉に対して心の目が開かれるかどうかによって分かります。その人が一時的に盲目に陥ったとしても、弟子であるならば必ず神に立ち返っていくでしょう。このことは、信仰者が一時的に罪によって真理が分からなくなり、闇の中を彷徨うことを表しているかも知れません。私たちは自らの罪によって、主イエスが見えなくなってしまうことがある。主を仰ぎ見ることを恐れるようになる。そして、高ぶりで心が一杯になっていることがあります。しかし、神は信仰者をそのままにしてはおかれませんか。御言葉によって語りかけ、ご自身に立ち返らせようと働きかけてくださいます。信仰者はある時にそのことに気づく。そして、悔い改めるのです。

私は若かりし頃、自分が当たり前にやっていたことが他の人に対して失礼であるということ、ある人から指摘されたことがありました。厳しく叱られました。私は当初、その人の言っていることが理解できず、顔も見たくない気持ちになっていました。しかし、大分経ってからガーンと頭を打たれるように、言われていたことが分かった瞬間があったのです。そして、二度とそのようなことをすまいと、主に祈りました。

今日の箇所です。弟子たちが「悟った」と言われている言葉を、「悔い改めた」と言い換えてみてもよいでしょう。悔い改めるところに霊的開眼があります。私たちはどうでしょうか。私たちの心は頑なになってはいないでしょうか。もしそのことが示されるのであれば、向きを変えたいと思います。主イエスの言葉がこの心に響いているかどうか。主の弟子であるならば、必ず「気づき」が与えられる時が来るでしょう。

【祈り】

人の心を知られる神よ。私たちが何を考えているか、一切をあなたはご存知です。私たちが恐れるのは、自分でも知らないうちに、あなたの嫌われる罪を犯していることです。いえ、内心気づいていながら蓋をしているのかも知れません。どうぞ、御前に正しく生きられるようにしてください。行ないだけではなく、心の思いに至るまで、きよくあることができますように。私たちに「悟り」をお与えください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
すべての人の心の思いを知り、真実を喜び給う、父なる神の愛。
ご自身の御言葉、御業の意味を悟らせ、信仰をもって受け留めさせ給う、主イエス・キリストの恵み。
鈍き心に語りかけ、悔い改めの喜びに導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。